

上で、中国は、核兵器の「無条件の先行（第一）不使用」、非核兵器国及び非核兵器地帯に対しては無条件で核兵器の使用及び使用の威嚇を行わないとする「無条件の消極的安全保証」、自らの核戦力を国家の安全保障に必要となる最低限のレベルに維持するといった核戦略を堅持すると表明しているが、一方で、近年はこうした説明に疑問を呈する指摘もある<sup>6</sup>。

また、90年代以降は通常ミサイル戦力の増強も重視されてきたとみられるが、世界の軍事動向における精密打撃能力の重要性の高まりがその背景として指摘されている。中国は核・ミサイル戦力を今後も引き続き重視していくものと考えられる。

中国は、大陸間弾道ミサイル (ICBM)、潜水艦発射弾道ミサイル (SLBM)、中距離弾道ミサイル (IRBM/MRBM)、短距離弾道ミサイル (SRBM) といった各種類・各射程の弾道ミサイルを保有している。これらの弾道ミサイル戦力は、液体燃料推進方式から固体燃料推進方式への更新による残存性及び即応性の向上が行われているほか、射程の延伸、命中精度の向上、終末誘導機動弾頭 (MaRV) 化や個別目標誘導複数弾頭 (MIRV) 化などの性能向上が図られているとみられている。

戦略核戦力である ICBM については、これまでその主力は固定式の液体燃料推進方式のミサイル DF-5 であった。近年、中国は、固体燃料推進方式で、発射台付き車両 (TEL) に搭載される移動型の DF-31 を配備している。また、中国は射程約 11,200km で 10 個の弾頭を搭載可能と指摘される新型 ICBM である **DF-41** を開発しており、DF-41 は 19 (令和元) 年 10 月に行われた建国 70

## (2) 核戦力及びミサイル戦力

中国は、核戦力及びその運搬手段としてのミサイルについて、1950年代半ば頃から独自の開発努力を続けており、抑止力の確保、通常戦力の補完及び国際社会における発言力の確保を企図しているものとみられている。核戦略に関して、中国は、核攻撃を受けた場合に、相手国の都市などの少数の目標に対して核による報復攻撃を行える能力を維持することにより、自国への核攻撃を抑止するとの戦略をとっているとみられている。その

### DF-41 大陸間弾道ミサイル

#### 諸元・性能

最大射程：11,200km

#### 概説

19 (令和元) 年 10 月の建国 70 周年軍事パレードで初めて登場した新型大陸間弾道ミサイル。10 個の個別目標誘導複数弾頭 (MIRV) を搭載可能と指摘されているとともに、高い精度での攻撃が可能とされる。



【Imaginechina/時事通信フォト】

<sup>6</sup> 米国防省「中華人民共和国の軍事及び安全保障の進展に関する年次報告」(19 (令和元) 年 5 月) による。

周年を記念する軍事パレードにおいて初めて登場した。SLBMについては、射程約8,000kmとみられている **JL-2** を搭載するためのジン級弾道ミサイル搭載原子力潜水艦 (SSBN) が運用中とみられ、ジン級SSBNの核抑止パトロールにより、戦略核戦力は大幅に向上するものと考えられる。加えて、中国は射程12,000kmから14,000kmに達するSLBMとも指摘される射程延伸型のJL-3及びそれを搭載するための新型SSBNの開発も行っているとの指摘もある。

中国の保有するミサイル戦力は、米国とロシア間の中距離核戦力 (INF) 全廃条約の枠組みの外に置かれてきており、同条約が規制していた射程500~5,500kmの地上発射型ミサイルをも多数含んでいる。わが国を含むインド太平洋地域を射程に収めるIRBM/MRBMについては、TELに搭載される移動型で固体燃料推進方式のDF-21やDF-26があり、これらは、通常・核両方の弾頭を搭載することが可能とされる。中国はDF-21を基にした命中精度の高い通常弾頭の弾道ミサイルを保有しており、空母などの洋上の艦艇を攻撃するための通常弾頭の対艦弾道ミサイル (ASBM) Anti-Ship Ballistic Missile DF-21D (空母キラーとも呼称される) を配備している。また、グアムを射程に収めるDF-26 (グアム・キラーとも呼称される) は、DF-21Dを基に開発された「第2世代ASBM」とされており、18 (平成30) 年4月、「戦闘序列に正式に加わった」として部隊配備が公表された。さらに、中国は、射程1,500km以上の長射程の対地巡航ミサイルであるCJ-20 (CJ-10) 及びこの巡航ミサイルを搭載可能なH-6爆撃機を保有している。これらは、弾道ミサイル戦力を補完し、わが国を含むインド太平洋地域を射程に収める戦力とみられている。また、19 (令和元) 年10月の建国70周年軍事パレードにおいては、超音速巡航ミサイルとされるCJ-100/DF-100も初めて展示された。これらASBM及び巡航ミサイルの戦力化は、「A2/AD」能力の強化につながるものと考えられる。SRBMについては、固体燃料推進方式のDF-16、DF-15及びDF-11を多数台湾正面に配備しており、わが国固有の領土である尖閣諸島を含む南西諸島の一部もその射程に入っているとみられる。

また、中国は、ミサイル防衛の突破が可能な打撃力を獲得するため、弾道ミサイルに搭載して打ち上げる複数モデルの極超音速滑空兵器の開発を急速に推進しているとみられ、14 (平成26) 年以降飛行試験が行われてきたと報じられている。19 (令和元) 年10月の建国70周年軍事パレードにおいては、極超音速滑空兵器を搭載可能なMRBMとされる **DF-17** が初めて登場した。また、18 (平成30) 年8月には、「ウェーブライダー」と呼ばれる形状の極超音速飛行体の実験を行ったとされる。これらの兵器は、超高速で低高度を飛行し、高い機動性を有することから、ミサイルによる迎撃がより困難とされている。

中国は、ミサイル防衛技術の開発にも力を入れているとみられる。10 (平成22) 年以降、ミッドコース段階におけるミサイル迎撃実験を行ってきっているとされている。また、19 (令和元) 年10月には、ロシアのプーチン大統領が、ロシアが中国の「ミサイル攻撃早期警戒システム」構築を支援している旨述べている。弾道ミサイル防衛技術は衛星破壊用ミサイルへの応用可能性を有することからも、弾道ミサイル防衛を含む中国のミサイル防衛の今後の動向が注目される。

**Q参照** 図表 I -2-2-2 (中国 (北京) を中心とする弾道ミサイルの射程 (イメージ))

図表 I -2-2-3 (中国の地上発射型弾道ミサイル発射機数の推移)

#### JL-2潜水艦発射弾道ミサイル

##### 諸元・性能

最大射程：8,000km

##### 概説

中国海軍の戦略核戦力とされる潜水艦発射弾道ミサイル (SLBM)。戦略核戦力のさらなる強化のため、射程を延伸したJL-3 SLBM (最大射程12,000~14,000km) の開発が行われているとされる。



【Avalon/時事通信フォト】

#### DF-17中距離弾道ミサイル

##### 諸元・性能

最大射程：1,800~2,500km

##### 概説

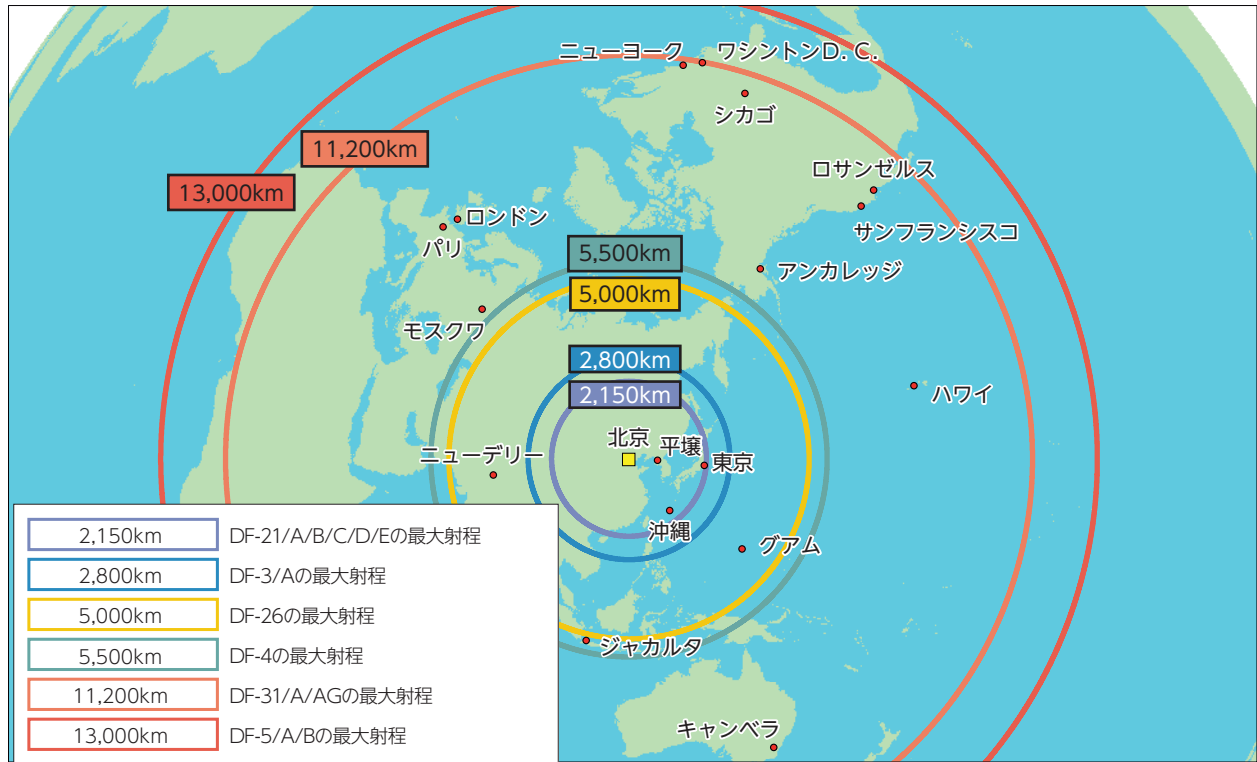
DF-16短距離弾道ミサイルをベースに開発されたと考えられ、極超音速滑空兵器 (HGV)

を搭載可能とされる準中距離弾道ミサイル。19 (令和元) 年10月の建国70周年軍事パレードで初めて登場した。



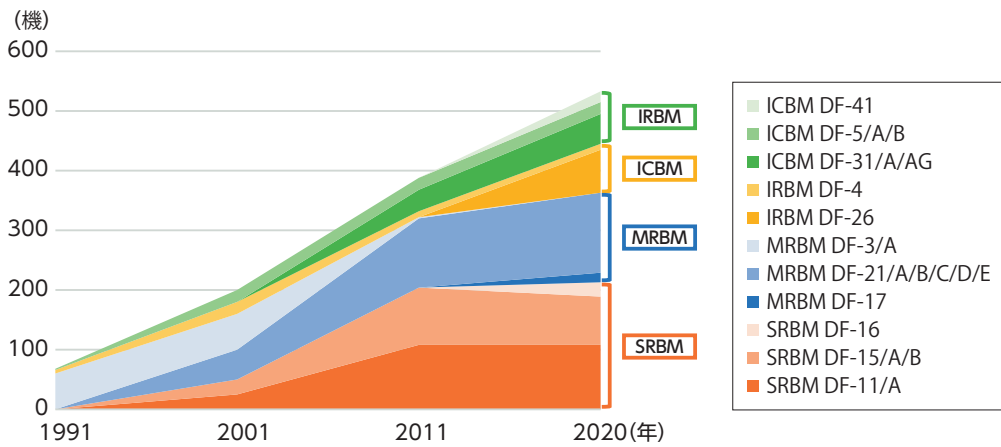
【Avalon/時事通信フォト】

図表 I-2-2-2 中国（北京）を中心とする弾道ミサイルの射程（イメージ）



(注) 上記の図は、便宜上北京を中心、各ミサイルの到達可能距離を概略のイメージとして示したものと

図表 I-2-2-3 中国の地上発射型弾道ミサイル発射機数の推移



※ 中国の保有する弾道ミサイルの発射機数、ミサイル数、弾頭数などについては、公表されていない。  
 ※ 本資料は、中国の保有する弾道ミサイルの発射機数について、ミリタリーバランス各年版を基に一般的な基準によりICBM、IRBM、MRBM及びSRBMに分類して示したものと。

7 米国防省「中華人民共和国の軍事及び安全保障の進展に関する年次報告」（19（令和元）年5月）による。